

山越阿弥陀

この絹本着色は、現世と阿弥陀様の西方極楽浄土を隔てる遠くの山々をお渡りになる阿弥陀様のお姿を描いている。この描写は、あとは「山々を越え」阿弥陀に合流するだけの信者を阿弥陀がここで歓迎しているということを表している。阿弥陀が信者を浄土に導くこのシーンは、来迎として知られており、平安時代(794-1185)に浄土宗の広がりとともに一般的に知られるようになった。この画には、阿弥陀様の両脇の脇侍である二体の菩薩、左側に勢至菩薩（梵名マハースターマラアープタ）が、右側に観音菩薩（梵名アヴァローキテーシュヴァラ）が描かれている。この神聖な三尊は、しばしば来迎図と一緒に描かれ、「阿弥陀三尊来迎図」として知られている。低い所で東西南北を守る四天王がそれぞれ四隅に立っている。信者を極楽浄土へと導くために、お越しになる阿弥陀様の情景は、平安時代（794～1185）浄土信仰の台頭により非常に人気のモチーフになった。永観堂に展示されている来迎図は模写であるが、オリジナルの絹本着色は、同様の図の中でも、現存する最古の最高品質の来迎図であると考えられており、国宝にも指定されている。

左上隅にある月は、サンスクリット語の中で最も基本的な形態素（意味を持つ最小単位）である母音阿「a」（अ）を囲んでいる月輪中である。このサンスクリット語の阿文字は、大日如来（大宇宙の佛陀）の形で具現化された、宇宙（本不生）すなわち、あらゆるものが空であり生滅がないこと「万有の根源」を意味している。真言宗では、この文字とそれに関連する概念は瞑想修行の重点であり、形で表現されていることで真言とのつながりを表している。

この来迎図は、元の大きな来迎図の縮小版であり、たった今、亡くなった人が阿弥陀様に迎えられ、極楽浄土に導かれることを確実にするための臨終の儀式の一部として使用された。この儀式の間、光は像の後ろに置かれ、阿弥陀様の三十二相の1つ、眉間のカールした毛の白毫の小さな穴を通して光を放つ。この白毫からの光は佛様が光を放っていると信じられていた。また別に、白毫は小さな宝石を図上に貼ることで表された。いくつか事例で、来迎図に描かれている阿弥陀様の手の近くの2つの穴に通された五色の糸が、死にかけている人に結び付けられることもあった。